

# 頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム —アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築— 出張報告

出張者：山根聡

出張期間：2014年12月11日～12月16日

出張先：ジャーナキーデーヴィー記念カレッジ、インディア・ハビタット・センター（インド）

出張報告：

今次出張ではまず、12月12日にデリー大学ジャーナキーデーヴィー記念カレッジ会議室において開催されたワークショップ“*What Do We Eat?: Food and Identity in India*”に参加し、’*More Sophisticated, More Nostalgic and More Romantic: A Study of the Urdu Writings on Cuisine Culture under the British Raj*’と題する報告を英語で行った。本ワークショップは、中世から現代に至るインドの食文化の様態を検討するものであった。1日のワークショップで、参加者が20名程度の小規模のものながら、日本人側5名、インド人側5名の計10名が各自の報告を行い、活発な議論が展開された。報告者は、英領期インドにおけるウルドゥー文人が、ムガル期の食文化を懐古する記述を多く残した事実に着目し、その懐古趣味のなかに、凋落したインド・ムスリムの文化を残そうとした意図だけでなく、様々な肉食料理の名前が優美なペルシア語の語彙や表現によって紹介されている点が、サンスクリット系の語彙を用い、肉食を忌避するヒンドゥーたちとの差異をより明確にしており、ヒンディー語とウルドゥー語の差異化を検討するうえで、語彙や文字のみならず「表現」という曖昧ながらも、人間の言語生活においてきわめて重要な要素があることを示した。時間的制限があったために、多くの事例を報告することができなかったが、具体例を示したところ、インド側研究者からその「表現」に対する共感が見られた点は、一定の成果があったものと感じた。本セミナーのインド側の参加研究者の多くは若手女性であったが、食文化研究を通しての様々なディシプリンの研究者が活発に発言する状況は、日印の研究交流の可能性を強く感じさせる有意義なものとなった。



インド人研究者との一コマ



出張者の報告風景

続く13日からは、インド国際会議場(インディア・ハビタット・センター)で開催された、わが国の人間文化研究機構による研究プロジェクト「現代インド研究」がインドのシヴ・ナダル大学と共に開催した3日間にわたる国際会議”*Perspectives, Dialogues and Challenges: India, Japan and the Making of Modern Asia*”に参加した。ここでは杉原薫前京都大学教授による基調講演に続き、11セッションで日本人11名とインド人ら外国人研究者11名がそれぞれの研究報告を行った。参加者は日印双方から20名程度が参加し、各報告に対する質疑は常に予定時間を超えるような熱心なものとなっていた。

会場のインド国際会議場は数多くの会議室等を持つ巨大なコンプレックスで、市内中心部に位置して

おり、学術振興に対するインド政府の取り組みの手厚さを感じるような充実した建造物であった。



インド・ハビタット・センター概観

出張者は初日午後のセッション”Modernity and Nation in the Everyday”の司会進行を務めた。本セッションでは、インド北東部の納豆のような発酵豆の料理を巡る民族意識の自覚などについての報告と、英領期インドにおける日本製タイルのインドへの流入についての報告があった。日本製タイルは、インド側の要望に応じてヒンドゥーの神や花の絵などが施された事例が豊富な写真と共に報告されたが、こうした事例は同時代の日本で製造されたインド向けマッチの箱のデザインに描かれたヒンドゥーの神や花の絵に通じており、すでに大石高志氏(神戸外国語大学)による先行研究があるところ、英領期の日印関係を考察する上での新たな可能性を感じた。また、発酵豆の報告を行ったインド人女性研究者は、ストックホルム大学の若手研究者であったが、こうした国際会議での報告は初めてであると言いながら、日本における南アジア研究の充実と質の高さに大きな感銘を受けたと話していた。すでに日印間での共同研究は高度なレベルで進められているが、若手育成の観点からも、こうした研究交流を続けることは極めて重要であることを痛感した。



出張者司会によるセッション



会議の様様(2日目)